

発達に偏りをもつ思春期女子と母親の双方向的関係への変容プロセス

—複線径路等至性モデル（TEM）を用いた質的研究—

沼田 あや子*

【要旨】

近年、発達に偏りをもつ女子は男子とは違う臨床像を見せることがわかってきた。女子には、周囲に合わせることができるために気づかれにくいことや睡眠障害や身体症状となって表れやすいことに加えて、母親との相互的關係を築くことの難しさがあるが、母親との關係性を分析した研究は少ない。そこで本研究では、ある一事例をもとに、発達に偏りのある思春期女子と母親との關係を、複線径路等至性モデル（TEM）を用いて質的に分析した。その結果、低学齡期までは娘の生活を母親がアレンジするという一方向的な關係だったのが、小学校後半では娘が発したメッセージを母親が受け取って行動や価値観を揺さぶられるという双方向的な關係に変容するプロセスを描き出した。さらに文化・社会的背景を踏まえた考察をしたところ、早期に発達の偏りが発見されていても学校に適應できる女子は母娘ともに負担が大きいこと、社会との相互作用によって娘が成長することで“普通の”女の子とは別の道を探し始めることが見えてきた。このことから、思春期には特に支援者の存在が必要であるという示唆を得た。最後に、周囲の大人のジェンダー観が女子当事者の発達特性を見誤る可能性につながるという課題を示した。

キーワード：発達，女子，複線径路等至性モデル（TEM）

* 子ども学部発達臨床学科／発達・教育相談室

NUMATA Ayako：The process of transformation in interactive relationship between an adolescent girl with developmental disability and her mother. -Qualitative research with Trajectory Equifinality Model (TEM)-

問題と目的

1. 発達障害言説における男子への偏り

近年、発達障害をもつ女子への支援が注目されている。これまで発達障害をもつ女性当事者によって個人的な経験は多く書かれていたが、それだけでなく支援者の立場から女子支援について書かれた著書が宮尾（2016）、川上・木谷（2019）によって出版されている。いずれの著書も発達障害研究がこれまで男子に偏っていたことに触れ、臨床における女子・女性特有の発達の偏りの現れ方を説明し、その特性に合わせた支援の必要性を強調している。

発達障害の男女差に関する研究は、主に自閉症スペクトラム障害（以下 ASD：Autism Spectrum Disorders）について多くおこなわれ、野田（2012）や岩男（2018）が文献的考察をしている。まず、疫学的研究において ASD を含めた発達障害は男児に多いことが明らかになっている（Werling & Geschwind, 2013）。しかし、疫学的調査の前提となる診断基準やアセスメントツールは男児の被験者にもとづいて作成されたため、女兒の症例を見逃している可能性があり、その結果男児の有病率が高くなっている可能性が指摘されている（Koenig, K. & Tsatsanis, 2005；山内・宮尾・奥山・井田, 2013）。

また、脳神経学の領域においては、脳の社会性領域の性差と ASD との関連の実証を試みた研究がある。山末・加藤（2011）は社会相互性の基盤をなす脳領域（上側頭溝や後部下前頭回などのミラーニューロンシステム）の体積の男女差と ASD 当事者と健常者の差から、女性の社会相互性の高さと ASD 有病率の低さを説明しようとした。脳の男女差によって上述の ASD の有病率の性差を説明するモデルといえる。しかし、社会相互性という高次機能の神経細胞のネットワークは未知の部分が多く、日進月歩で新しい知見が生まれている。近年では脳梁が注目されており、脳梁の形成と ASD に関連がある可能性が指摘されている（Wegiel et al., 2017）。また、脳梁の構造には性差があることがわかっているが、その差は発達段階によって変わることも明らかになった（Schmied et al., 2020）。このように、脳の構造と性差と ASD の関連は部分的にしか解明されておらず、現段階では脳神経学と結びつけて男子の有病率の高さを説明することは難しいといえる。

研究の技術的な課題だけではなく、精神医学や心理学は文化・社会的にジェンダーステレオタイプの影響を大きく受けてきたという経緯があり、脳の性差と ASD の問題を早急に結びつける問題設定そのものに対して批判がされている（綾屋, 2012）。脳神経学分野においても現在は ASD 有病率の性差よりも、ASD 女性は ASD 男性に比べて自閉的な特徴を強く表現しないという臨床像の要因となるメカニズム—ジェンダーステ

レオタイプを含む一に関心が寄せられている (Lai et al, 2017; Lai & Szatmari, 2020)。

2. 発達障害臨床からみた女子の特徴

ASD を含む発達障害の臨床像が男女で異なるという見解は多くの研究で共通している。大橋・齋藤 (2016) は、ASD 女児の臨床像の特徴として、①対人コミュニケーションの障害が目立たない、②反復的・常同的行動が軽度、③二次障害や併存症を主訴とする受診が多い、④遅延模倣能力により集団生活では適応している、⑤視空間情報処理能力が苦手、という5つを示した。②に関してはLaiら (2011) によるASD傾向をもつ男女の比較調査の、男子と比べて女子はこだわり行動が少ないという結果と一致する。山内ら (2013) は、認知面における差異とこだわり行動の差異に関連があると推測している。

女子の幼児期とそれ以降の臨床像の違いを比較すると興味深い事実が見えてくる。1歳5か月～3歳9か月の幼児期のASDの男女の臨床像を比較した研究では、女子は男子よりもコミュニケーションの欠如が高く、睡眠の問題や不安や抑うつ的な感情が強い (Hartley & Sikora, 2009) ことが示されている。女子の方がコミュニケーションの欠如が高いという特徴は大橋らが示した臨床像 (2016) とは異なるが、幼児期には欠如が認められても、遅延模倣能力によって年齢が上がるにつれて適応しているように見えると推察できる。それは、自閉傾向のある男女間では共感性欠如の程度に差はなくても、実際の対人コミュニケーションの問題の顕在化は女子の方が少ないという調査結果 (Lai, et al., 2011) と一致するものである。また、脳画像を用いた双生児研究によって、ASD特性と遺伝子との関連は男女ともに見られる一方で、ASD女性の脳は環境の感受性が強いことが明らかになり、周囲との調整のために大きな負担がかかっている可能性が示された (Cauvet et al., 2020)。このようなASD女性の“カモフラージュ”経験は現在注目されており、性別を考慮したアセスメントツールを開発するためには、さらなる当事者の主観的経験の調査が求められている (Fombonne, 2020)。

女子の社会適応への経験は、いくつかの質的研究において当事者の声で語られている。Bargielaら (2016) によるASD特性をもつ女性へのインタビュー調査では、ほとんどのインタビューは学齢期に普通であるかのように振る舞いその場に適応しようとした経験があると語った。また、ASD特性のある女性は思春期以降に周囲とのコミュニケーションのズレに対する自覚を抱いてから非常に気を遣って生活を送るという (砂川, 2016)。彼女たちの適応への努力は心身への大きな負荷となっていることが考えられるが、それは公の場では表出されにくい。

3. 発達に偏りがある女子への配慮

発達の偏りがある女子への配慮はどこで誰によっておこなわれているのだろうか。臨

床における女子の特徴のひとつに医療機関の受診時の年齢が高く、介入が遅れる傾向にあることが問題視されている（Giarelli et al., 2010：Bargiela, 2016）。山内ら（2013）は、臨床データから、女子は9歳以下での受診が少なく10～15歳の受診が73%を占めていたことを示し、そのうち、広汎性発達障害を疑う症状が幼児期にすでにあったと推察されたのは81.8%だったが、そのうち就学前に受診していたのは13.6%のみだったことを示し、女子の発達障害の見逃されやすさを指摘した。また、女子は初診に至る理由として、睡眠リズム障害や過眠などの睡眠の問題、頭痛・腹痛などの身体症状（山内ら, 2013）、感覚過敏（Lai, et al., 2011）を抱えていることが多い。これらの問題があるにもかかわらず、女子は本人の努力により社会適応が比較的良く見えるため、学齢期において適切な支援を受けられていないと考えられる。

ASDを含む発達障害をもつ女子の特徴に配慮した支援は、川俣（2015）の相談の場における個別支援、佐田久（2013）、神谷・辻井・石川（2007）、木谷ら（2019）のグループ支援が報告されている。いずれも対象となる女子が思春期～成人であり、幼少期からの支援、特に家庭におけるケアについて言及しているものは少ない。しかし、学校などの公の場において発達の問題を表面化させないまま生活している場合、家庭での保護者によるケアは重要となる。睡眠リズム障害などの睡眠の問題や身体症状が出現したときに最初に対処しなければならないのは保護者だからである。

4. 発達に偏りのある娘と母親の関係性

ASDをもつ娘の養育に注目して母親の語りを分析した高崎（2018）は、外からは見えにくい問題を抱える娘を養育する難しさを概念化して考察した。母親には家庭内でしか見せない娘の一面を学校の教師に話しても理解してもらえないつらさがあり、母親の相談ニーズが高いことに言及した。また、発達に偏りがあり不登校傾向がある娘とその母の親子並行面接をした別府ら（2010）は、イライラしやすい娘に対して母親は娘の要求や主張を満たすだけで信頼感にもとづいた相互的關係を築けていないという親子關係の問題点に気づいた。発達に偏りがある女子は学校生活で問題がなくても家庭では自己主張が強くなり母親との確執が生まれやすいことを宮尾（2016）も指摘している。その要因のひとつとして、母と娘の關係の近さによってお互いが自分の姿を重ねてしまうことをあげている。コミュニケーションのずれに対して、母親は「娘が自分の邪魔をしている」と感じ、娘からは「子育てに失敗した母親」扱いを受けるという。

母娘關係の確執が指摘される一方で、ASD当事者の綿貫（2019）は、幼少期からの経緯を振り返るなかで、友だちと遊ぶ約束をしたときに母親が喜んでくれた様子とそれが叶わなかったときの母親への申し訳なさについて語っている。自らをアレキシサイミア（失感情症）の傾向があるとしながらも、母親の期待は敏感に感じ取り、それに応えようとしてきたことがわかる。家庭の外では受け身で「大人しさのベール」（砂川、

2015)をかぶって過ごしている娘にとって、家庭における母親は自分を出せる相手であり、同時に影響を強く受ける存在と考えることができる。

5. 本研究の目的

以上のように、これまで発達障害をもつ女子に関する研究は複数の領域でおこなわれてきた。特に男女差に関しては関心が高く、脳の男女差はまだ解明の途中だが臨床像に性差が見られることは明らかであり、女子の発達障害の早期発見・早期支援や当事者経験の知見の蓄積が今後の課題と言われている(野田, 2012; 岩男, 2018)。その支援の前段階として、個人の経験だけでなく、成長のキーパーソンとなり得る母親と歩むプロセスを明らかにすることは理解の一助になると考えるが、母親の経験を扱った研究は高崎(2018)に限られており、発達に偏りをもつ娘と母親の関係性の研究はまだされていない。そこで、本研究ではある事例をもとに、発達に偏りのある女子の発達プロセスとその母親の関わりのプロセスの両方を分析し、幼少期から思春期までの母娘の関係性の変容プロセスを明らかにすることを目指す。母娘に限らず親子の関係性は個別性が高い。一般化へと急ぐ前に、まずは実際に存在する事象を描き出すために一事例を詳細に分析・考察する。

方法

1. 研究協力者の概要

(1) 協力者の選択理由

発達に偏りがある中学生女子Aさんとその母親に協力を依頼した。Aさんの発達のプロセスが本研究の問題・関心に合致したため、分析する対象事例とした。合致した点は次の3つである：①幼児期には自閉傾向があったものの徐々に目立たなくなり学校適応が良好な期間が長かった、②不安や身体症状が思春期以降に目立つようになった、③母親がAさんを手厚くサポートしている。

(2) これまでの経過

次にAさんの生育歴を記述する。筆者は本研究の調査以前から、ある相談の場においてAさん母娘とは面識があったが、筆記された記録が手元にないため、本研究をおこなうにあたって記憶を辿りながら母親とともにAさんの生育歴を確認した。

Aさんは乳児期に運動発達の遅れが見られ医療機関を受診した。継続的に発達をフォローしてもらうなかで幼児期にコミュニケーションの苦手さが明らかになり、現在に至るまで数か月に1度のペースで通院しているが診断名は確定していない。小学校卒業時に受けたウェクスラー式知能検査(WISC-IV)の結果は、全検査IQ102で4つの指標にお

ける合成得点は言語理解93、知覚処理100、ワーキングメモリー112、処理速度107であった。知的な遅れはない。検査当時は、検査者によって「初めての場面では不安が強くなる」、「学習・経験したことは習得し活用することができる」という見立てがされた。

小学校では入学から卒業まで通常学級に所属し、成績はクラス内では平均より上であった。通級指導は利用しなかった。小学校低学年の頃から習い事を複数続けている。友人関係での大きなトラブルはなかったが、4年生のときに摂食の問題を抱え、養護教諭やスクールカウンセラーの支援があり3か月ほどで改善した。6年生の夏頃から登校を嫌がるようになり休みがちになった。

中学校では通常級に所属しているが教室にいると息苦しさや悪心があるため授業にはほとんど出席せず、別室登校をおこなっている。通級指導と適応指導教室、スクールカウンセラーの支援を受けている。家庭での生活リズムは整っており、安定して過ごしている。習い事は毎回通うことができている。

2. 倫理的配慮

研究を開始するにあたって、白梅学園大学・白梅学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た（申請番号 201926）。倫理的配慮として、インタビュー依頼時に、本論の目的を文書と口頭で説明した。研究発表においては語りがそのまま引用されることがあること、その際には個人が特定されるような情報は出さないことを伝えたとうえで、インタビュー拒否の自由を説明した。インタビュー開始時に、インタビューで得たデータの保護と回答拒否の自由を説明し、同意書に署名してもらった。音声データの逐語化に際して、個人名はイニシャル表記として、個人情報に配慮した。分析後に、分析結果を開示して内容を確認してもらい、語りの引用の許可を取った。

3. データ収集

20XX年2月から9月の間に、Aさんと母親、母子分離で各3回ずつ1回あたり平均40分（最短23分、最長60分）のインタビューをおこなった。1回目のインタビュー中は語られたことを用紙に書き留め、記録とした。2回目のインタビューでは同意を得られたためICレコーダーで録音した。3回のインタビュー形式と質問項目を表1に示す。

表1 インタビューの概要および質問項目

インタビュー	Aさん	Aさん母
1回目 20XX年2月	現在の困り事（非構造化）	現在の困り事（非構造化）
2回目 20XX年4月	成長の振り返り（半構造化） ① 自分の強みと弱み ② 去年と比べて成長したこと	Aさんの生育歴（半構造化） ① 受診歴と相談歴 ② 学校における支援

3 回目 20XX年 9 月	分析結果の確認 ① 年表を見ながら、発言の確認 ② 最近の発見	分析結果の確認 ① BEPで別の選択をしていたらどう だったか ② EFPの確認
-------------------	---------------------------------------	---

4．分析方法

Aさんの発達プロセスと母親の関わりの相互関係について検討するため、複線径路等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下TEM）を用いた。TEMは文化心理学者Valsinerの「人間は常に外界と交換を通じて変化し続けるオープンシステムである」という理論にもとづき、ひとつのユニークな事例にもとづいて実存性を重視し、過程を明らかにする分析方法である（サトウ, 2015）。TEMの大きな特徴は等至点（Eauifinality Point: EFP）である。これはBertalanffyによる“オープンシステムは等至性をもつ”というテーゼに依拠した概念で、ある経験をした人たちが時間を経て同じような行動や選択に至るという意味をもつ。つまり、人間の発達過程においてはひとつのゴールに対して複線の多様な径路が想定し得るという発達の認識である。この認識にもとづき、TEMはある人の「ライフ」における選択や認識の変容・維持の様相を、歴史的・文化的・社会文脈と時間のなかで描き出すことを目的としている（安田, 2015）。本研究は、現在の発達障害にまつわる社会的文脈が女子・女性に影響していると予想していること、本研究の目的がプロセスと人間の有り様を重視していることから、分析方法にTEMを採用した。

5．分析の手順

最初に、インタビューの記録を読みすすめ、本研究の分析対象である思春期女子の発達プロセスと母親の関わりについての語りに印をつけた。次に、Aさんの発達プロセスにおける事象を年表として書き出した。それに加えて、Aさんの語りのなかに自身の感覚を表現する言葉があったため、それらをそのまま年表に書き入れた。

次に、母親の娘への関わりを時系列に並べた。Aさんの発達プロセス年表と母親の関わりプロセスを並列にした。後に二つのプロセスの相互作用を検討するためである。さらに、母親のインタビューで自身の心理について豊富に語られたため、語られた言葉をそのまま書き入れた。

その後、母親の関わりプロセスをTEM図に修正した。母親の語りのみTEM図にしたのは、母親の語りの方が自分の視点・娘の視点、過去の振り返り・未来の予測など複数の観点から語られて、複数の多様な径路が見えやすかったからである。

TEM図にはその基礎概念である「等至点（EFP）」を設定する必要がある。これを本研究では「娘をがんばらせない」に設定した。筆者が語りを分析している途中で、Aさんの母親が娘に対して万全に介入する関わりから適度な距離をもった関わりに変化した

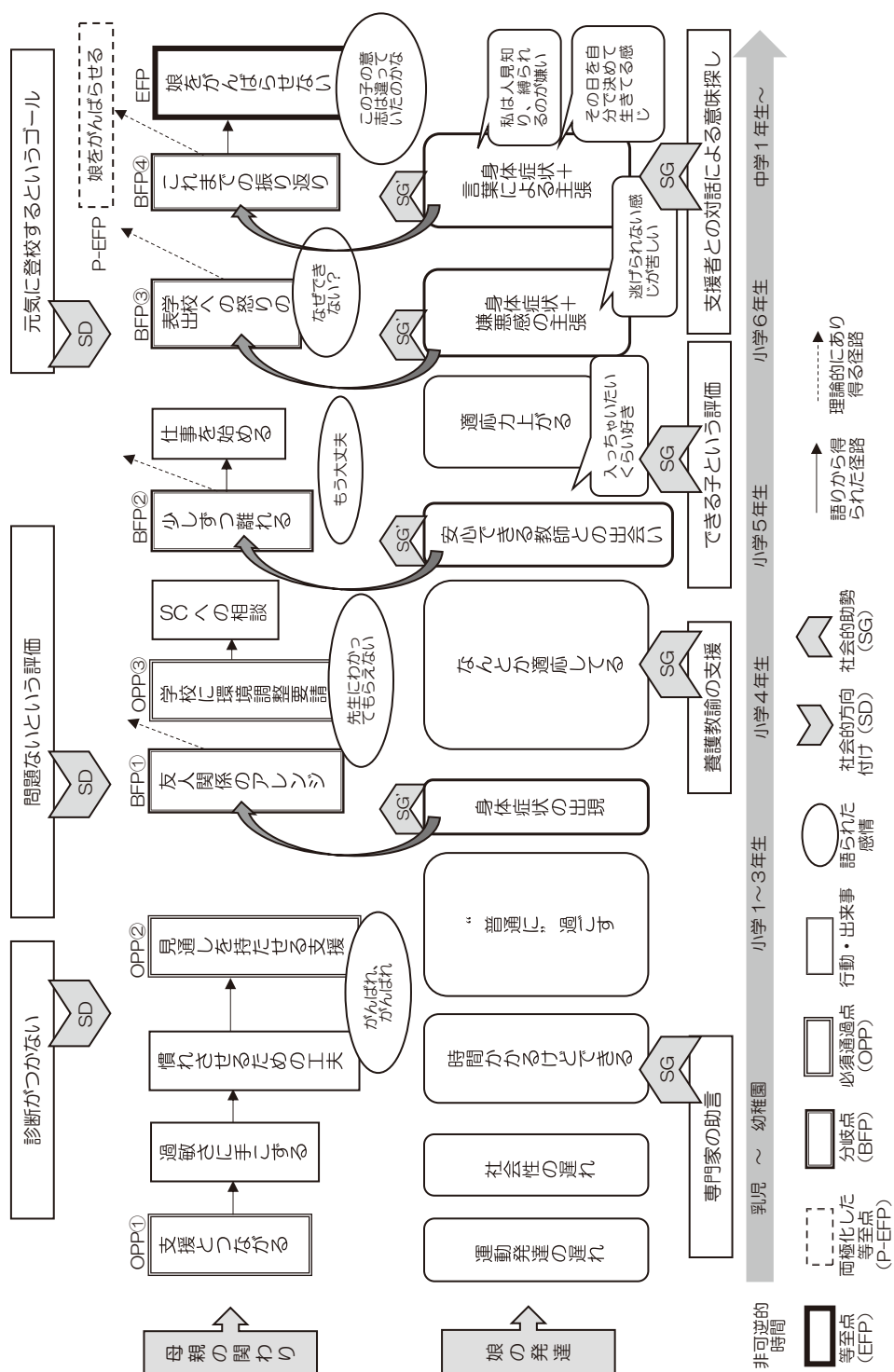
と感じたためである。次に「両極化した等至点 (Polarize Equifinality Point: P-EFP)」を理論的に設定し、さらに、「社会的方向づけ (Social Direction: SD)」「社会的助勢 (Social Guidance: SG)」の影響を見ながら、「分岐点 (Bifurcation Point: BFP)」「必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)」を位置づけた。BEPについては、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) の理論的枠組みを参照し、娘への関わり方に変化が起こっていると説明できる時点を設定した。TLMGについては考察で詳しく説明する。基礎概念の説明と本研究における位置づけは表2に示した。

表2 TEMによる分析で用いた概念の位置づけ

概念		本論での位置づけ
等至点 (EFP)	複数の多様な経路を経由しても同じ結果が実現する。この最終状態のこと	・娘をがんばらせない
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点と対極の意味をもつ。意味のあるP-EFPはEFPの意味づけを豊かにする	・娘をがんばらせる
分岐点 (BFP)	いくつかの経路の分かれ道、新しい選択肢	① 友人関係のアレンジ ② 少しずつ離れる ③ 学校への怒りの表出 ④ これまでの振り返り
必須通過点 (OPP)	必須のこととして経験される出来事	① 支援とつながる ② 見通しを持たせる支援 ③ 学校に環境調整要請
社会的方向付け (SD)	EFPに向かうのを阻害する力	・診断がつかない ・問題ないという評価 ・元気に登校するというゴール
社会的助勢 (SG)	EFPへの歩みを後押しする力	・専門家の助言 ・養護教諭の支援 ・できる子という評価 ・専門家との対話による意味探し

結果

分析の結果として、TEM図を図1に示した。本図の時系列に沿って、母娘の相互関係のストーリーを記述する。このストーリーはAさん母娘の偶有的 (コンティンジェント) なものの見方で構成される物語世界 (安田, 2015) の記述であるといえる。語りのなかから焦点化して図1に記載した行動や事象を〔 〕で示し、TEM概念を()で付記する。



1. 発達に偏りがある子としての乳幼児期

Aさんは乳児期に運動発達の遅れがあり〔支援とつながる〕(OPP①) ことになった。乳幼児健診などで発達の遅れが発見された場合、自治体の母子保健事業のフォロー対象となり支援につながるため、母親にとって選択の余地はなかった。Aさんが1歳4か月で歩き始めてからは運動の遅れは目立たなくなり、母親から見ると同年齢の子へのコミュニケーションの一方的な特徴が気になり始めた。また、初めての場所への慣れにくさが目立ってきて、〔過敏さに手こずる〕が、慣れれば周囲は気にならなくなるという繰り返しだった。主治医からは「発達に偏りがあるが発達障害とまではいえない」という見立てで診断名はつかず (SD)、母親は対応の助言をもらいながら、幼稚園や初めての場所に「慣れさせるための工夫」を重ね、幼稚園年長になる頃には、“時間はかかるけどできないことはない” くらいに成長した。

2. 頑張ってる子としての小学校前半

小学校生活には心配していたよりもスムーズに慣れた。近所の同級生と一緒に登下校し、放課後は一緒に遊び、大きなトラブルなく過ごした。しかし、友だちと一緒にでないと不安が強まることもあり、その時は母親が、先のことがわからないと不安になる Aさんのために、やるべきことを具体的に伝えるなどをして〔見通しを持たせる支援〕(OPP②) をしていた。幼稚園～この時期の気持ちを母親は「がんばれ、がんばれと思いながらやってました」と語っている。Aさんは学校の勉強も習い事もまじめにこなし、学校の教師は発達の偏りについては問題ないと評価していた (SD)。

3. 環境で大揺れの小学校後半

小学4年生になる直前、Aさんの体重が減り、給食をほとんど食べていないことがわかった。「教室で食べていると気持ち悪くなる」という。養護教諭の発見と介入があり、給食を保健室で食べるようになると、4年生になる頃には少しずつ食べられるようになり、ほとんどの日を教室で食べるようになった。この時、母親や養護教諭がたずねても、どんなことに困っているかを Aさん本人は言葉にすることはできなかった。母親は悪心の原因が友人関係にあるのではないかと心配し、気を配るようになる。どの友だちと一緒に行動すればいいか迷う Aさんに、母親は積極的に〔友人関係のアレンジ〕(BFP①) をするようになった。曖昧なことがわかりにくい Aさんのために、母親は〔学校に環境調整要請〕(OPP③) するが、身体症状が消えてしまうと、Aさんが抱えている問題は周囲からはわかりづらく、担任は積極的に動いてくれなかった。この時の母親は「先生にわかってもらえない」とスクールカウンセラーに相談している。

5年生になると快活で物をはっきり言う“体育会系”の教師が担任になった。この担任は Aさんにとって安心できる人物だったようで、不安の少ない学校生活を送れるよ

うになった。この担任はAさんのことを「できる子だから自信をもってほしい」と評価した。この担任についてAさんは「言ってることがすごくわかりやすい」と語り、「入っちゃいたいくらい好き」と表現した。母親はAさんが自分で友だちと遊ぶ約束をするようになったことに安心し、外での仕事を始め、徐々にAさんへの関わりを減らして「少しずつ離れる」(BFP②)ようにした。その生活にAさんが慣れてくると、一人であることが増えて、初めてのことに對しての適応力が上がっていった。この時、母親は「もう大丈夫」と思ったという。

4. 意志を探している思春期

6年生になり担任が変わると、再びAさんは戸惑うことが多くなった。そんなAさんを母親はおおらかに励ましていたが、Aさんは徐々に担任に対する不満を口にするようになり、脚の痛みを理由にこれまで好きだった行事への参加も消極的になっていった。この時のことをAさんは「(教室にいと)逃げられない感じがして苦しい」と言葉にしている。卒業が近くなる頃には学校に行くことを嫌がるようになり、それまで見守っていた母親は学校に再度発達の偏りに合った対応を求めた。しかし、Aさんが求めていることを何度説明してもわかってもらえないと言って、最後には「学校への怒りを出す」(BFP③)させ、管理職らとの話し合いの場をもった。その後、Aさんへの支援に関する中学校への申し送りや引き継ぎは、母親と学校によって丁寧に行われた。

中学1年生になっても、Aさんは毎日学校に行くことはなかった。胃痛や悪心などの身体症状が増えたが、その一方で、自分の要求を徐々に言葉にして主張することができるようになった。「私は人見知り」「あれこれ言われて縛られるのが嫌い」と、自分という人間について言葉にし、母親にも自分の気持ちを伝えられるようになった。複数の支援者がAさんとの対話を続けていただけでなく、母親とも対話をし、そのなかでAさんの変化を成長と意味づけていた。インタビューをおこなったのはこの時点である。母親は教室に戻そうとするような関わりはしなくなり、「この子はずっと違和感だらけだったのかなって思う」「なんとなくやらせてきちゃったけど、本人は大変だったんだろうな」「本当は自分の意志は違ってたのかな」と「これまでの振り返り」(BFP④)を言葉にした。母親にとってはAさんのこれからの進路に不安はあるが、Aさんに今やるべきことを伝え、それを受けてAさんはできる範囲を母親に伝え、母親はそれを聴き入れて、無理に「娘をがんばらせない」(EFP)ことにした。しかし、がんばらせるか／がんばらせないかの間をまだ迷う時があるという。身体の不調のため病院や整体に通うことは続いているが、Aさんは現在の自分について「その日を自分で決めて生きてる感じ」という言葉で表現した。

考察

1. 母娘の一方方向の関係から双方向的关系への変化 一分岐点の質的变化

Aさんの発達プロセスと並列させながら母親のTEM図を作成する過程で一番はじめに気づいた特徴は、娘に大きな変化が起こると母親の分岐点（BFP）が訪れていることである。この関連は母親の娘への関わりの強さの表れと考えることができる。発達の偏りを持ちながらも学校では問題ないという評価を受けている女子は学校適応に努力していると考えられるが、母親も娘のフォローに尽力し学校適応に貢献している場合、関わりの量・密度がともに大きいといえる。

次に、時間軸に沿って母娘の関係性のプロセスに視点を移したときに注目したのは、一方方向的な関係から双方向的关系への変化である。乳幼児期から小学校前半にかけては専門家の助言を得ながら見通しを持たせる支援をしており、それは慣れにくさをもつ子を育てる母親の多くが辿る道といえる。その関係に変化が見られたのは小学校後半で、小学校前半におけるBFP①とBFP②では娘の状態によって母が行動を変えるという関係であったものが、小学校後半以降のBFP③とBFP④ではAさんは意図をもって母親になにかを伝えようとしており、母親がそれに応答している関係になっている。この関係性の変化は、Aさんの成長が後押しとなって起きていると考えられる。Aさんは幼児期からコミュニケーションの苦しさがあり、自分の願望を把握し表現することが難しかった。そのため母親の助けと本人のがんばりで“普通に”過ごせていた。しかし、学校の先生という他者との出会いを通して成長することで、母親にメッセージを送ることができた。そのメッセージが身体症状や登校渋りという表現であったことは発達の偏りがある女子の特徴といえるだろう。

この変化は、母親の応答性の高さも後押しとなっている。BFP③〔学校への怒りの表出〕は、母親がAさんの学校への不信感の表出に呼応するかのように強く揺さぶられた結果であった。この分岐点でもしAさんの切迫したメッセージが母親に伝わっていなかったらどうなっていただろうか？また、Aさんのために母親が怒ってくれていなかったらどうなっていただろうか？このような疑問から別のあり得た径路を理論的に想定してみると、〔娘をがんばらせる〕という両極化した等至点（P-EFP）が見えてくる。この径路を辿っていた場合、Aさんのその後の成長は回り道をするようになったかもしれない。Aさんの成長は母親にメッセージを送り、それに呼応した母親の変化はさらにAさんの成長に影響を与えたと考えられ、ここに小学校前半には見られなかった双方向的关系を見ることができる。

さらに、分岐点の背景にある母親の内的な変化を詳細に見ていくと、BFP ①～ BFP

③と BFP ④では質的な差異があることに気づく。サトウ (2015) が体系化した複線径路等至性アプローチ (TEA) には、人が新しい選択肢をする分岐点を説明するモデルとして、発生の三層モデル (TLMG) がある (図 2)。このモデルにおける第 1 層は行為、第 2 層は記号、第 3 層は価値の層を意味する。人は外からの情報を取り込み新しい促進的記号が発生した時 (第 2 層) に、個人の行動 (第 1 層) を変える。時には価値変容 (第 3 層) にまで至る。この一連のうごきが分岐点を引き起こす。A さんの母娘の BFP ①～③では、母親は発達の評価という専門家による文化的記号と A さんの育児の経験をすり合わせて (第 2 層)、行動を変えているが、BEP ④においては A さんの切迫した要請によって [これまでの振り返り] をせざるを得なくなり、価値変容 (第 3 層) にまで至っていると考えることができる。本研究の TEM 図において、双方向的関係が成立した後に個人の価値変容が生起している。価値変容には社会との相互作用が関係しているといえるだろう。

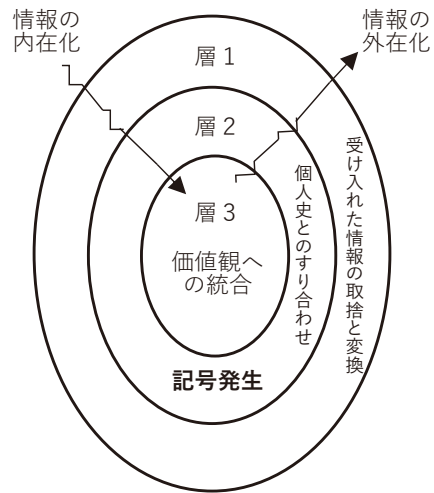


図2 発生の三層モデル(サトウ, 2015)

2. 発達の偏りが早期に発見されても負担は続く ー社会的方向づけとのせめぎ合い

次は、母娘の歩みと社会的文脈との関係を考察する。TEA において、社会的助勢 (SG) は等至点への歩みを後押しする力で、社会的方向づけ (SD) は等至点に向かうのを阻害する力としている。本研究の TEM 図 (図 1) では SG は二重構造になっており、学校や専門家からの後押し (SG) と、その支援を受けた A さんの成長による後押し (SG') が、母親の選択に影響を与えている。

SD と SG がせめぎ合うポイントを考察することは、社会的文脈を生きる人間を理解することに役立つ。A さんは幼児期から現在に至るまで、問題ないという評価 (SD) がありながらも専門家の支援を必要とする状況 (SG) があり、長らくその狭間にあった。矛盾するような評価と状況がせめぎ合うなかで、母親が一番の支援者にならざるを得なかったことがわかる。特に学校の支援が届かないのが放課後の友人関係である。そのため、母親は [友人関係のアレンジ] (BFP ①) をし始め、A さんの生活全体をアレンジしていた。母娘の努力で A さんはなんとか適応していたが、適応できていても母親には大きな心理的な負担がかかり続け、振り返ると A さんもそうであった可能性が見えてきた。このことから、たとえ早期発見されていても学校生活に適応しているように見

えると周囲から発達特性を理解してもらうことは難しく、母親のケア負担と母娘の心理的負担が大きくなることがわかる。

3. “普通の”女の子という一本道ではない ―社会とのつながりで生まれる可能性

では、Aさん母娘はどのような社会に適応しようとしていたのだろうか。特に登校を渋ることが増えた小学校6年生の時期には、Aさんの母親は、毎日元気に登校する（SD）という学校をめぐる社会的規範にとらわれて苦しんでいたといえる。母親は当初は学校に行かせる努力をした。しかしAさんの身体はNoと主張しており、そのせめぎ合いが〔これまでの振り返り〕（BFP④）を誘発したと考えられる。我が国には社会的・文化的に、“普通の”女の子は毎日学校へ行き、授業を受け、友だちと他愛もないおしゃべりを楽しみ関係を深めるという主流のストーリーが存在する。そのような学校生活を送った母親にとって、同性の娘がそのストーリーを選ばないことを受け入れるのは難しいだろう。母親が思い描く女子の姿は、娘への関わり方に影響を及ぼしている可能性は高い。母親は“普通の”女の子がすることができるようAさんを支援してきたが、インタビュー時には「この子の意志は違っていたのかな」「もうなにが普通かわからなくなってきました」と語っている。TEM図の等至点では、Aさんの母親のなかの“普通”の枠組みが崩れて別の道を探り始めている。

社会的文脈とともに個人の物語世界を見ることは、支援者にとって必要な視点を与えてくれる。本研究のTEM図ではSDとSGが環境の変化によって入れ替わるというプロセスが見られた。Aさんに対する問題ないという評価は母娘の隠れた負担を大きくしたが、5年生で担任が変わると、できる子という評価が今度はAさんに自信を与え、母親がAさんとの距離を少しずつ離していくという分岐点（BFP②）の後押しをした。この事象は、発達に偏りがあったとしても、社会との相互作用によって発達の道筋は複数の可能性に開かれていることを示唆している。人生におけるある時点での選択は、人との出会いや身体の状態などさまざまな要因によって決まる。選択の結果が一見遠回りや逆戻りに見えるものであったとしても、社会に開かれていればいずれ等至点に到達するプロセスを知ること、未来志向で個人を見ることができる。支援者に必要な視点である。

4. 支援と研究、それぞれの課題

本研究では、発達に偏りのある娘と母親の関係性に注目し、低学齢期までは娘の生活を母親がアレンジするという一方的な関係だったのが、思春期以降、娘が発するメッセージを母親が受け取ることで価値観を揺さぶられるという双方向的な関係に変化するプロセスを描いた。そして、そのプロセスは社会的文脈によって方向づけられながらも、社会とのつながりによる娘の成長が変容を後押ししていることを示した。まとめとして、

Aさんの発達プロセスを先行研究と照合しながら振り返り、今後の支援の課題を考察し、最後に研究の課題について触れる。

Aさんの発達プロセスは、発達障害をもつ女子・女性に関する先行研究と大部分が一致するものであった。乳児～幼稚園の時期は、明らかに発達の偏りの特徴的な様子が観察されている。しかし、多くのASD男児に比べて興味の限局やこだわりは強くなく、女子の集団から外れることもなかった。Aさんのように違和感をもっているにもかかわらず適応していた場合、たとえ発達の偏りが早期発見されたとしても、学校では支援対象となりにくい。Aさんは医療機関に定期的に受診し、スクールカウンセラーと面談を継続していたにもかかわらず、思春期にさしかかった頃から悪心、胃痛、脚の痛み、首の痛みなどさまざまな身体症状を表した。このことは思春期に併存症を主訴として受診するケースが多いという大橋・齋藤（2016）の指摘と一致する。その一方で、Aさんは身体の不調と並行して、徐々に自分の違和感について語るという成長が見られた。その時期の社会的助勢（SG）には、専門家との継続的な対話があった。このことから、本研究で描いたプロセスを手がかりに支援者の位置づけを考えるとすれば、思春期における対話にもとづいた関わりに貢献し得ると言える。

本研究で示唆された支援の課題は、発達に偏りがある女子の理解における支援者のジェンダー観である。Aさんは小学校に入ってから同級生の女の子といつも一緒に過ごし、アイドルなどの共通の話題で盛り上がる様子なども見られた。母親もそのような友だちづきあいを前提として友人関係をアレンジしていた。給食が食べられなくなった時は、担任教師は不安の高まりというよりも体重を気にしたダイエットと捉えられていたようだ。食べない原因はダイエットという先入観に加え、摂食障害は母娘の問題という先入観も問題の所在を見誤らせたことが推測できる。母親がもつジェンダーステレオタイプ、教師がもつジェンダーステレオタイプが、Aさんの発達特性の理解を妨げてしまったといえる。支援者は自分のジェンダー観を見つめ直すことが必要だろう。

発達の特性を理解する際に、ジェンダーセンシティブになることとジェンダーステレオタイプをもつことは異なる。ASD当事者である綾屋（2012）は、ジェンダーステレオタイプを通してASDを考察することは、ASDの特性をもつ人の最も切実なニーズから目をそらしてしまうと警告している。性別二元論にもとづいた理解や支援は問い直される時期に来ていると言える。その一方で、先行研究で既に指摘されているように、男児・男性に偏った診断基準やアセスメントツールに対してはジェンダーセンシティブになる必要がある。ASD当事者であるSimone（2010/2011）は「私たち、ASDの女性はサブカルチャーの中でもさらにサブカルチャーの存在です。特徴や態度、習慣、抱える問題はASD男性に見られるものと同じことが多いのですが、女性の場合、独特の『ひねり』が加わります。」と言い、女性と男性では「知覚の仕方が違う」と述べている。発達に偏りをもつ女子が周囲の周囲に追いやられがちな現状に対して、女兒・女性特有の知覚の仕

方、身体感覚、ホルモンの作用の知識を体系化する研究を支援者が取り入れていく必要がある。

本研究では早期に支援につながった事例であったが、発達の偏りがあっても支援につながっていない思春期女子には当てはまらない部分があると考えられる。また、家庭でのケアには家庭によって違いがあるため、より多様な事例を見ていく必要がある。今後支援の場に還元する理論を構築するためには、多様な事例の差異とともに、そのなかからある一定の構造を見つけていく作業が必要と考える。今後の研究課題としたい。

【引用文献】

- 綾屋紗月. (2012). 発達障害とジェンダーの交差するところ. *アスペハート*, 10 (3), 28-37.
- Bargiela, S., Steward, R. & Mandy, W. (2016). The Experiences of Late-diagnosed Women with Autism Spectrum Conditions: An Investigation of the Female Autism Phenotype. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 46, 3281-3294.
- 別府悦子・瀬野由衣・清水章子・木村美奈子. (2010). アスペルガー症候群が疑われた不登校傾向女児への親子並行面接の経過. *中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要* (11), 156-164.
- Cauvet, E., van't Westeinde, A., Toro, R., Kuja-Halkola, R., Neufeld, J., Mevel, K. & Bolte, S. (2019). Sex Differences Along the Autism Continuum: A Twin Study of Brain Structure. *Cerebral Cortex*, 29, 1342-150.
- Fombonne, E. (2020). Camouflage and autism. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 61, 735-738.
- Giarelli, E., Wiggins, L.D., Rice, C.E., Levy, S.E., Kirby, R.S., Pinto-Martin, J., & Mandell, D. (2010). Sex differences in the evaluation and diagnosis of autism spectrum disorders among children. *Disability and Health Journal*, 3(2), 107-116.
- Hartley, S.L. & Sikora, D.M. (2009). Sex Differences in Autism Spectrum Disorder: An Examination of Developmental Functioning, Autistic Symptoms, and Coexisting Behavior Problems in Toddlers. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 39(12), 1715.
- 岩男美美. (2018). わが国における自閉症スペクトラム障害の助勢への支援に関する文献的考察. *中村学園大学発達支援センター研究紀要*, 9, 1-8.
- 神谷美里・辻井正次・石川道子. (2007). 高機能広汎性発達障害女子のグループ活動の試み. *小児の精神と神経*, 47 (2), 115-122.
- 川上ちひろ・木谷秀勝. (2019). 発達障害のある女の子・女性の支援. 東京: 金子書房.
- 川俣理恵. (2015). 高等学校におけるアスペルガー症候群の女子生徒に対する学校適応支援. *早稲田大学大学院教育学研究科紀要*, 別冊22 (2), 61-71.

- 木谷秀勝・岩男英美・土橋悠加・豊丹生啓子・飯田潤子・牛見明日香・山村友梨紗.
(2019). 青年期女性ASDの「自己理解」プログラムの実践. *山口教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 47, 29-36.
- Koenig, K. & Tsatsanis, K.D. (2005). Pervasive developmental disorders in girls. In DJ. Bell, S.L., Foster & E.J. Masha(Eds), *handbook of behavioral and emotional problems in girls*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Lai, M., Lombardo, M.V., Pasco, G., Ruigrok, A.N.V., Wheelwright, S.J., Sadek, S.A., Chakrabarti, B., Consortium, M.A. & Baron-Cohen, S. (2011). Behavioral Comparison of Male and Female Adults with High Functioning Autism Spectrum Conditions. *PLoS ONE*, 6(6), 1-10.
- Lai, M.C., Lerch, J.P., Floris, D.L, Ruigrok, A.N.V., Pohl, A., Lombardo, M.V. & Baron-Cohen, S. (2017). Imaging Sex/Gender and Autism in the Brain: Etiological Implications. *Journal of Neuroscience Research*, 95, 380-397.
- Lai, M.C. & Szatmari, P. (2020). Sex and gender impacts on the behavioural presentation and recognition of autism. *Current Opinion in Psychiatry*, 33(2), 117-123.
- 宮尾益知. (2016). ASD、ADHD、LD 女の子の発達障害. 東京：河出書房新社.
- 野田航. (2012). 性差に関連した海外の文献レビュー. *アスペハート*, 10 (3), 16-21.
- 大橋圭・齋藤伸治. (2016). 自閉症スペクトラム障害と性差. *小児科臨床*, 69 (8), 1327-1330.
- 佐田久真貴. (2013). 応用行動分析学に基づくPDD女子グループプログラムの実践報告. *小児の精神と神経*, 53 (3), 233-243.
- サトウタツヤ. (2015). TEMというアプローチ. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), *TEA理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ*. 東京：新曜社.
- Schmied, A., Soda, T., Gerig, G., Styner, M., Swanson, M.R., Elison, J.T., Shen, M.D., McKinstry, R.C., Pruett Jr., J.R., Botteron, K.N., Estes, A.M., Dager, S.R., Hazlett, H.C., Schults, R.T., Piven, J. & Wolff, J.J. (2020). Sex differences associated with corpus callosum development in human infants: A longitudinal multimodal imaging study. *Neuro Image*, 215, 116821.
- Simone, R. (2011). アスパーガール アスペルガーの女性に力を. (牧野恵, 訳). 東京：スペクトラム出版社. (Simone, R. (2010). *Aspergirls Empowering Females with Asperger Syndrome*. London: Jessica Kingsley Publishers.)
- 砂川芽吹. (2015). 自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきたのか：障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて. *発達心理学研究*, 26 (2), 87-97.
- 高崎順子. (2018). 女子自閉症スペクトラム障害の養育困難について—母親インタビューから—. *金城学院大学大学院人間生活学研究科論集*. (18), 1-12.

- 綿貫愛子. (2019). 当事者の立場から. 川上ちひろ・木谷秀勝 (編), *発達障害のある女の子・女性の支援* (pp.109-116). 東京: 金子書房.
- Wegiel, J., Flory, M., Kaczmarek, W. Brown, W.T., Chadman, K., Wisniewski T., Nowicki, K., Kuchna, I., Ma, S.Y., & Wegiel, J. (2017). Partial Agenesis and Hypoplasia of the Corpus Callosum in Idiopathic Autism. *Journal of Neuropathology & Experimental Neurology*, 76(3), 225-237.
- Werling, D.M. & Geschwind, D.H. (2013). Sex differences in autism spectrum disorders. *Curr Opin Neurol*, 26(2), 146-153.
- 山末英典・加藤進昌. (2011). 性差と自閉症. *臨床精神医学*, 40 (2), 153-160.
- 山内裕子・宮尾益知・奥山真紀子・井田博幸. (2013). 女児Asperger障害の臨床的特徴. *脳と発達*, 45, 366-370.
- 安田裕子. (2015). TEMの基本と展開. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), *TEA理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ*. 東京: 新曜社.

ぬまた あやこ (発達心理学)